

巻頭のことは

『ICU 教育研究』は、その第一号を、1955年5月に出しているが、その巻頭に「ICU 教育研究所設置の趣旨とその課題」という、日高第四郎先生の文章がのっている。それは十一頁に亘る長いもので、当時のわが国の思想状況、そこでの教育の任務及びその ICU での具体化のプログラム等が詳細に、しかも原理的に説明されている。そして、当時は計画にすぎなかった教育大学院の課題として次の6項目があげられている。すなわち、A. 教育哲学の研究。B. 教育におけるキリスト教原理の研究。C. 国際理解の教育の調査研究。D. 教育心理学及教育社会学の研究。E. 視聴覚教育の研究及実験。F. 大学生の補導問題の調査。である。その後、この大学院は、1957年4月、教育哲学、教育心理学、英語教育、理科教育、視聴覚教育の5研究学科の陣容を整えて出発した。そして、昨年(1965年)、博士課程も設けられて今日にいたっている。

上のような、日高先生の巻頭言によって始まる『ICU 教育研究』第一号は、その「編集後記」のなかで、教育研究所やその機関誌に托する抱負は、「人間形成の問題を、キリスト教信仰という共通の基盤に立って、国際的環境のなかで追究してゆく」ことだと語られている。これらの課題や抱負や期待が、どの程度、実現してきたかは、見る人の批判に任せるほかない。しかし、研究所、大学院、教育学科設置(1962年発足)という過去十年余の実際の歩みを迎って見ると、始めに置かれた原則的なものが、現実的条件による変容を受けながらも、どのようにして貫かれてきたかがわかって、興味のつきない事柄である。勿論、将来起こるべき行動の原則は、実際の行動の過程、すなわち、行動がそこにおいて起る環境的条件との交渉において、自己自身を修正してゆく仮説的なものであるが、その自己修正を正当化するものは、結局、その原理において究局的に目指されている

目的（理念，理想）以外にはない。したがって，その修正とは，原理遂行の手段方法（技術）の領域に起る事柄であるほかない。もしも，原理そのものの修正ということならば，それは，ある原理を捨てて他の原理をとるということ，ある行動の系列をやめて他の行動の系列をとることになってしまう。

それ故，原理の採用はあくまでも慎重に，そして聰明になされなければならない。何故ならば原理とは，環境的条件によって，その手段の点では修正を迫られるが，同時に，環境的条件そのものを変えてゆくよりどころなのだからである。

しっかりした原則を立てて，一つの大学院を出現させてゆくというよう
な困難な仕事は，勿論，多くの人びとの協力あってのことである。しかし，
上述のように，ICUでの場合，その協力体制の主軸としてはたらいてこら
れたのは，日高先生であって，先生のすぐれた判断と忍耐強さに負うとこ
ろが多いことは，異論のないところであろう。この仕事に協力された数多
い人びとのうち，創立時から10数年に亘ってICUそのものの建設に尽さ
れて，今夏，退職帰国されたトロイヤー先生（Dr. Maurice E. Troyer）
も忘れることのできない人びとの一人であろう。当時の学務副学長として，
また心理学者として，大学院の設置及び内容充実に尽された先生の功績は
大きい。矢張，心理学者として学問的きびしさを堅持されつつ，常に大学
院の学問的レベルの向上に配慮された岡部弥太郎先生の御努力も忘れる
ことはできない。日高・岡部両先生は，今春（1966年）定年制の故に，退
職なさり，現在は客員教授として，われわれを指導下さっている。私共は
以上三先生の御功績を記念し，感謝するために，この号を三先生に捧げる
次第であるが，いろいろ不備の点が多いことはおゆるしいただきたいと思
っている。

（1966・12・小島記）